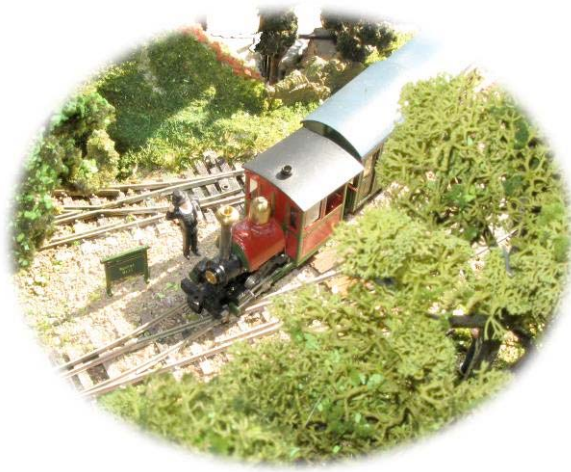


The Norman's Story

ノーマンさんとノーマンさんの駅のささやかな物語り



柳原 望 野中健一

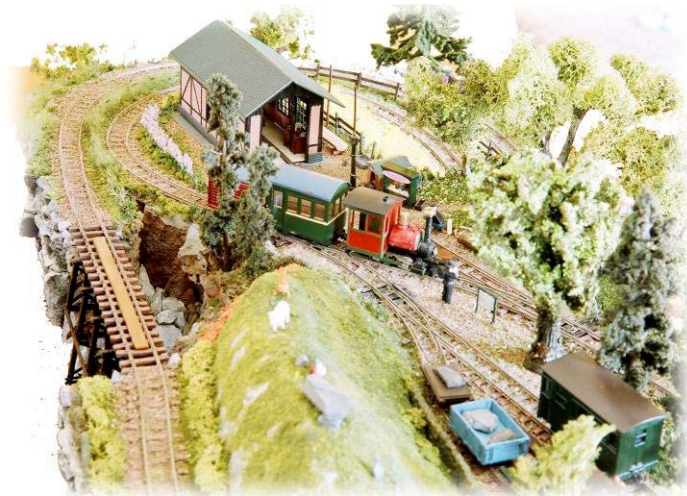
私は北ウェールズの田舎にある「ハリエニシダ・ヒル」という駅の古ぼけた車庫です。今日は私の御主人ノーマンさんのお話をしたいと思います。



*

まず、「ハリエニシダ・ヒル」について少し説明しておきましょう。ここは名前の通りハリエニシダの咲き乱れる丘の上に立つ小さな駅です。丘を駆け上がってきた汽車は、ここで一休みしていました。終点「ランズエンド」と牛の競り市でかるうじて知られている「カウタウン」に挟まれ、よくいえば伝統的な村、悪く言えばうんざりする程何もない田舎の村の駅です。昔々、ノーマンさんのおじいさんの時代には私の駅からカウタウンへ送られる多くの牛や羊たちを乗せて毎日のように列車が走っていました。辺り一帯から切り出されるスレート鉱石も運ばれていました。もちろん人も生活物資も列車で行き来していました。でも、だんだん輸送手段がトラッ

クに取って代わられて、ノーマンさんが若い頃には週に一度くらいしか列車が通らなくなりました。そして今は、月に一度程度しか走らなくなってしまいました。終点ランズエンドはもう人さえも住まない廃駅になってしまっているのです、実質的に私の所が終点のようなものです。最近は保存鉄道にして観光列車にしようという話しも出ているそうですが、さて、どうなることやら。



*

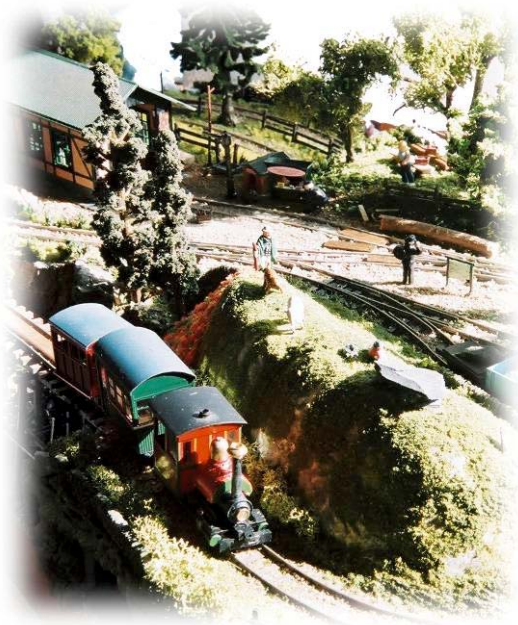
ノーマン・スティー爾さんは、3代続いた鉄道マンです。スティー爾の名前の通り、おじいさんは機関車の整備をする整備工でした。よく私の中で一晩中石炭にまみれて機関車の整備をしていたのを懐かしく思います。

ノーマンさんもちろん整備士が本業なのですが、だんだんと鉄道が廃れてくるのに伴って、この駅の駅員さんも兼任しています。私は今でも自称現役の機関庫なのですが、最近では私の中で汽車が

整備される事はほとんどなくなって少し寂しい思いをしています。もちろん列車が運行される日と整備の仕事がある日しか仕事がないノーマンさんはもっと寂しい思いをしているのでしょうか。でもきっとノーマンさんはいつものようにニコニコ笑って「年寄りにはちょうどいいんだよ」と言うんでしょうね。

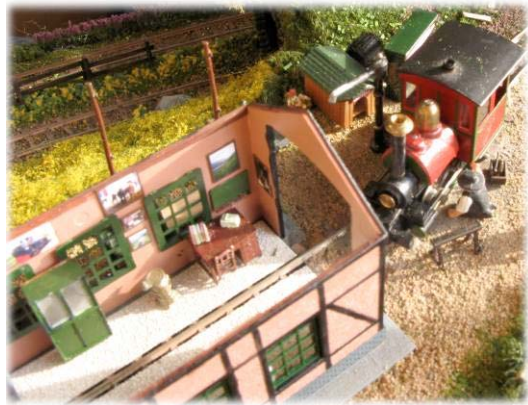
列車が運行される日は、いつもは静かな私の周りにカウタウンに送られる牛や羊がいっぱい連れてこられ、とても賑やかになります。ノーマンさんは列車がやってくるまでとっておきの紅茶を振る舞って、農家の人とおしゃべりをするのが今では何よりの楽しみになっています。

駅の西にはさらに丘が続きます。そこは家畜たちにとってごちそうがいっぱい生えている場所です。家畜の放牧にやって来た牧童たちはこの丘にやって来ると必ず私の方を見ます。ハリエニシダの模様の旗が立っていると、その日はノーマンさんの御出勤の日。牧童たちはお昼の時間になるといそいそとノーマンさんの所へやってきます。もちろんノーマンさんの紅茶がお目当てです。ノーマンさんもお一時のおしゃべりのお礼にと、お昼が近くなると私の中の一角にある御自慢の



ストーブで熱いお湯を湧かして馴染みの客の訪れを待ちます。そうそう、その御自慢のストーブの横には小さな作り付けの戸棚があって、扉には奥さんのマーガレットさん、娘さんのノラさん、そしてお孫さんのジェニファーちゃんやコリンくんの写真が所狭しと張ってあります。

そしてその戸棚の奥にはとっておきのウイスキーがこっそりと隠してあります。ああ、でも雨の日や特別寒い日には紅茶に一零たらすだけです。真面目なノーマンさんは仕事にお酒を飲む事はありませんから。



駅の南西はちょっと前まで雑木林でした。でも、去年ノーマンさんが伐ってしまいました。実はノーマンさんの最愛の奥さん、マーガレットさんが2年前にガンで亡くなってしまったのです。享年58歳のとても若い死でした。ノーマンさんは1年近くずっと沈んだ様子でした。でも、いつまでも泣いてばかりではマーガレットさんが安心して神様に召される事ができないだろうと思うようになりました。そこでその雑木林があった場所に花壇を作って奥さんと同じ名前のマーガレットを植えようと考えたのです。どうして列車がよく見えるその場所に作ろうと思い立ったのでしょうか。それをお話するにはノーマンさんとマーガレットさんの恋の話にまで遡らねばなりません。



＊

マーガレットさんは３８年前、２２歳の時に一人の青年と恋をしました。青年の名前はチャペック。チェコの人です。チェコといえば有名なのは人形劇。青年も人形劇作家としてケルトの伝説を調べにこの小さな村までやって来たのでした。

チャペック青年は肩まで伸びた栗色の髪を後ろで一つにくくり、ヒョロリと背の高い人物でした。その細い身体が折れそうな程大きなリュックを背負ってノーマンさんの駅にやって来ました。あちこちで伝説を拾集していて話題の豊富なチャペックさんにマーガレットさんはたちまち恋に落ちました。何しろマーガレットさんは生まれてこの方、この村を出た事がありません。チャペックさんの言葉の後ろに無限に広がる世界を感じたのでしょう。

その頃ノーマンさんは28歳。今と変わらず無口で無骨な性格だったノーマンさんは二人の恋をひっそりと見守るしかありませんでした。二人はよく村びとの目を逃れて丘の上でデートをしていました。丘の上には小さなドルメンがあって、そこが二人の指定席でした。今でも探せば残っているはずですよ。チャペックさんがマーガレットさんに誓った愛の言葉のらくがきが。



でも、チャペックさんは所詮流れ者。半年も経たないうちにこの村を去っていきました。二人の間にどんな約束があったのかはノーマンさんは知りません。知っているのは、マーガレットさんはそれから毎週列車が来るたびにチャペックさんからの手紙が届いてないか息をきらしながら駅に駆け込んで来るようになった事。そして、チャペックさんの手紙がやって来たのは最初の2便・・・つまり2週間だけ。それからは一通も来なかった事だけです。

アイルランドの西の島の海で遭難し、命を落とした青年がチャペックさんらしいという事を風の便りで聞きました。でもそれはチャペックさんがマーガレットさんの元を去って10年以上たってからの事です。

毎週毎週やって来てはがっかりと肩を落とすマーガレットさんの為に、ノーマンさんはある時はとっておきの紅茶を出してやり、あるときは気を紛らわそうと慣れない冗談などを言ったりしました。そう、ノーマンさんはけなげなマーガレットさんにいつしか恋心を抱くようになっていたのです。

そしてチャペックさんが去って五年たったある日、ノーマンさんは意を決してマーガレットさんにプロポーズしました。マーガレットさんの返事は・・・ノーマンさんがこの5年間ずっと望んでいた彼女のこぼれるような笑顔でした。実はマーガレットさんもチャペックさんの手紙は、ノーマンさんに会う為の口実にいつの間にかなっていたのです。マーガレットさん自身も自分がそんな笑顔をしてはじめてそのことに気付いたとか。マーガレットさんは少しヌケているところがあるみたいです。

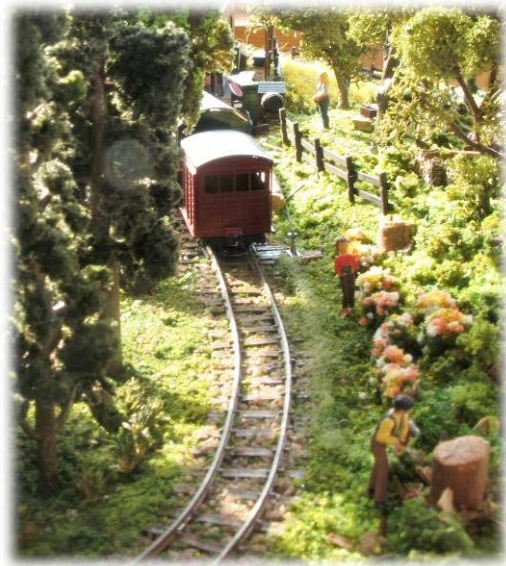
そして33年前の温かい春の日、ハリエニシダの花が咲き開いた中、二人は結婚式を上げました。もちろん結婚パーティの会場は私でしたよ。裏へ回ってごらん下さい。板を打ち付けてある壁がありますから。その時悪ガキが花火をあげようとして失敗。黒く焦げた所をノーマンさんが修理してくれたのです。あの時は火事になるかと本当にヒヤっとしました。



さて、マーガレットさんの得意はジャムづくりでした。マーガレットさんのお母さんから、そしてお母さんはおばあちゃんから代々伝えられて来た、とっておきのジャムです。特にお気に入りには木苺。マーガレットさんは木苺がいっぱい実る秘密の場所を持ってました。それは今、ノーマンさんがマーガレットの花壇を作ろうとしている雑木林を抜けて線路の北側にある斜面にあります。だから雑木林の中にはマーガレットさんが通った跡にできた細い道があるんです。これだけでもこの場所に花壇を作ろうとして理由がわかるでしょう。

でも、もう一つ理由はあるんです。

マーガレットさんには列車が通るたびにびくりと列車を振り返るクセがありました。それはまだチャペックさんからの手紙を待っているのかただ単に習慣になってしまったものなのか。ノーマンさんは聞きませんでした。



た。マーガレットさん自身もきっと答えられなかったでしょう。ノーマンさんはそんなマーガレットさんの様子を怒るでもなく悲しむでもなくただ遠くから静かに見守っていたのでした。花壇を列車がよく見えるこの場所に作ろうとしたのは、そんなマーガレットさんへの思いがあっての事みたいです。

ノーマンさんとマーガレットさんは結婚した次の年に一人の女の子を授かりました。名前はノラちゃん。マーガレットさんによく似た女の子をノーマンさんは目の中に入れても痛くない程可愛がりました。

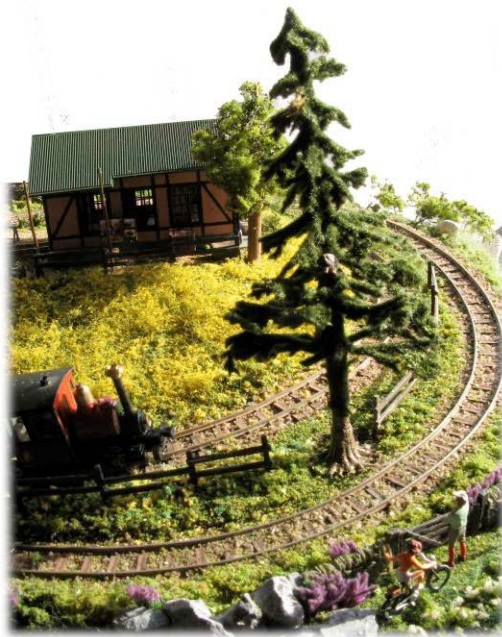
ある日ノラちゃんが近所の牧場から牧羊犬の子供を貰ってきました。もちろんノーマンさんは牧畜をやっているわけではないので牧羊犬は必要ありません。でもノラちゃんの嬉しそうな顔を見て飼う事に決めました。犬の名前はボビー。ノラちゃんが大好きな絵本の主人公の名前から取って決めました。ノーマンさんはノラちゃんと二人でボビーの為に立派な犬小屋を作ってやりました。列車の修理工が本職のノーマンさんは大工仕事がお得意です。この時ばかりは大いに父親の威厳をノラちゃんにアピールできたものです。でも残念ながらボビーはこの小屋はお気に召さなかったようで、ストーブの近くにひいてあるローブの上で眠るのがお気に入りとなってしまいました。

＊

ノラちゃんが18になった年、ノーマンさんにとって一生の中で3本の指に入る大事件が起りました。

それは4月といえどもまだ寒い日でした。南の丘を下ったところにある大きな杉の木の下で一人の青年が寒さに震えていました。ノーマンさんは気の毒に思っ私の中に招き入れ、ストーブの前に椅子を置いてやり、とっておきのウイスキーを青年に飲ませてやりました。青年は人懐っこそうな笑顔でノーマンさんにお礼をいいました。その青年がノラさんの夫となるショーンくんでした。

ショーンくんはリバプールに住む大学生です。大学の休みを利用して北ウエールズを自転車でまわる旅をしていました。こんなへんぴな場所に来たのは実はその大杉の木にいつも巣を作っている鷹を見るためでした。その鷹は村の守り神と言われ、キースと名付けられていました。キースを題材にした物語りまであるんですよ。実はその物語りが学校の教科書に採用されているのです。ショーンはハイスクール時代に読んだそのキースに会ってみたくて今回の旅の目的地を決めたそうです。でもキースはお出かけ中だったのか見る事ができませんでした。そしてショーンくんはキースに会うかわりにノラちゃんに会ってしまったのです。



ノラちゃんは都会からやって来た若者にたちまち虜になってしまいました。ノラちゃんもハイスクールは出ましたが、卒業後すぐに隣町カウタウンの雑貨店の店員になったので、リバプールほどの都会へは一度か二度、友達と遊びに行った程度でしか知りません。ましてやショーンくんは世界屈指の大都会、ロンドンへだって何度も通っていると言うではありませんか。都会の空気に憧れるノラちゃんにとって、ショーンくんはキラキラと光って見えました。

ショーンくんが去った後、ノラちゃんはショーンくんと文通を始めたようでした。ノラちゃんもかつてのマーガレットさんがそうだったように、列車が到着するとそわそわとやって来るようになりました。そして郵便屋さんを捕まえて自分宛ての手紙がないか聞くのです。手紙があった日はノーマンさんでさえどきりとする程幸せそうな顔をノラちゃんはしたものでした。



都会から来た青年に魅かれるさま、手紙を心待ちにするさまは昔のマーガレットさんと重なってノーマンさんは心穏やかではいられませんでした。ついノラちゃんにつらくあたってしまうようになりました。優しくったお父さんの豹変ぶりに戸惑うノラちゃん。そんな様子を見兼ねてマーガレットさんはノラちゃんに自分の恋の話を聞かせたのでした。

ノラちゃんはお母さんの話に反発します。まだ若いノラちゃんにはチャペックさんについていかなかったお母さんの気持ちが全く理解できませんでした。お母さんは意気地なしで好きでもなかったお父さんと結婚したんだ、と思い込んでしまいます。陰悪になったお父さんへの反発はノラちゃんの中で田舎への嫌悪感へと育って行きます。

そうして一年程たったある日、事件は起ります。なんといきなり
ショーンくんがノラちゃんを尋ねて来たのです。

忘れもしません。その日は犬のボビーが珍しく自分の小屋で眠って
いました。そしてその横に、ショーンくんが立っているのです。夢
にまで見た愛しい恋人の出現にノラちゃんは声も出ませんでした。
そしてショーンくんは言いました。一緒に暮らそう、と。



ショーンくんの両親はちょうどフラワームーブメント、いわゆるヒ
ッピーの洗礼を受けた人たちで、音楽や芸術に傾倒した人々でした。
ショーンくんの名前がジョン・レノンの息子の名前と同じだと知っ
て何より喜ぶタイプです。そしてショーンくんも多分に両親の影響
を受けていました。ショーンくんは大学をやめて音楽家の道を進む
と決心したのです。そして、もちろん音楽活動の横には恋人がいて
欲しいものなのです。

ショーンくんの申し出に最初ノラちゃんはためらっていた様子
でした。ところが運悪く、その話をノーマンさんが立ち聞きしてし

まったのです。

ノーマンさんはマーガレットさんの思い出と重なってしまったのでしょう。後にも先にもあれほどノーマンさんが激怒したのは私は見た事がありません。真っ青な顔で別人かと思うほど、目を釣り上げたノーマンさん。つかつかとショーンくんの元へ歩み寄っていきなり胸ぐらを掴むと思いきりなぐったのです。ショーンくんは奇妙な悲鳴とともに吹っ飛んで、ボビーの小屋の屋根に思いきり顔をぶつけてしまいました。コロ、と何かが地面に落ちました。それはぶつかった衝撃で折れた犬小屋の屋根の端っことショーンくんの前歯が一本。ショーンくんの口からだらだらと血が流れました。ノラちゃんの引き裂くような悲鳴にボビーが驚いてキャンキャンと鳴きながら私の中に逃げ込んで来ました。今でも犬小屋の屋根が少し欠けているのはその時の出来事が原因なのです。

お父さんの暴力への怒りと反発がノラちゃんの気持ちを決めさせました。ノラちゃんとショーンくんはショーンくんを運んで来た列車、終点ランズエンドから引き返して来たその列車に飛び乗ってノーマンさんの所から去って行きました。二人が動き出した列車にひらりと飛び乗るさまはまるで映画のようで、私、きっといつまでも忘れられないでしょう。そしてその列車を呆然と見送って大粒の涙を流すノーマンさんの顔も。



しばらくは音信不通だったノラちゃんも、1年ほど経った頃から、マーガレットさんには近況の手紙を送って来るようになりました。そうしてまたマーガレットさんの手紙を待つ日々が始まりました。ノーマンさんはいきなりショーンくんを殴ってしまった事を深く悔いて、静かに二人を見守る事にしました。

ちょうどその頃、ノラちゃんがもらって来た犬ボビーが老衰で死んでしまいました。誰も彼も自分から去って行くようでノーマンさんはひどく気落ちしてしまいました。そんなノーマンさんを見兼ねてマーガレットさんはボビーによく似た犬をもらって来ます。マーガレットさんはそのいたずらっ気いっぱいの子犬に妖精の名前であるトロールという名を付けました。その時のノーマンさんの複雑な表情ったら。思い返すだけでも気の毒です。

だって、考えてもみてください。ノラちゃんの事件はマーガレットさんが出来なかったこの村からの脱出を叶えたものなのです。そして、相手は違っても手紙を待ち続けるマーガレットさんを再び見続け、そしてマーガレットさんの口から出た名前が妖精の名前。そう、ケルト伝説を採集に来たチャペックさんをやっぱり思い出してしまうのです。

翌日、マーガレットさんが犬小屋へ行ってみるとボビーと書いてあった所の上にペンキが塗られ、トロールと名前が書いてありました。ノーマンさんがやったのです。ノーマンさんは思ったのでしょう。自分が過去に捕われていた事が結局今回の事件をおこしてしまったのだ、と。だからもうすべて受け入れよう、と。ノーマンさん

は静かにそれを実行したのです。そう、ノーマンさんはそういう人なんです。犬小屋の二代目の主人の名前はトロールに決まりました。



若いうちの逃避行は長くは続きません。リバプール、ロンドンと転々としたノラちゃんに何があったのか詳しい事は知りません。12年の間にジェニファーちゃん、コリンくん、と2人の子供にも恵まれたようです。でも、芸術家の夫について行く生活は子供を育てる女性にとって楽ではないことだけは想像できます。それなのにショーンさんは今度はニューヨークへ渡ると言い出したのです。

そんな時、マーガレットさんが病に倒れました。ガンだと診断されました。そして長くはない、とも宣告されました。ノーマンさんはひとしきり悩んだ後、ノラさんに手紙を書きました。ノラさんは手紙を見てすぐにショーンさんに懇願しました。ウエールズにいっしょに来てくれ、と。でもショーンさんはニューヨーク行きを断念しません。芸術家にとって田舎へ帰る事は挫折以外なにものでもないのです。

そんな夫との生活に限界を感じたノラさんは、子供を連れて両親の元へ帰って来ました。

病床で瘦せてしまった母親を前に、昔、恋人についていかなかったマーガレットさんを意気地なしと責めた自分を思い出しました。でも、自分も結局は貫く事ができなかった。ノラさんは泣きながら過去の暴言を謝りました。そんなノラさんにマーガレットさんは、「何も言わなくていいの。全部わかってるから」と優しく肩をだいたのです。そして言いました。「でもひとつだけ忘れないでね。私達がここにいるのはこの村から逃れられなかったからじゃないの。私たちはここにいる事を選んだのよ。」と。

そんな言葉を物陰でそっと聞いているノーマンさんの姿がありました。きっと内心とてもうれしかったでしょうね。



マーガレットさんはそれから一年半ほど闘病生活をした後、惜しまれながらこの世を去りました。その一年半の間にマーガレットさんは得意の木苺のジャムの作り方をみっちりとノラさんに伝えました。ノーマンさんの大好物だからです。

今、マーガレットさんが形作っていた木苺畑への道はノラさんが引き継いでいます。そしてノラさんも列車が通るたび、マーガレットさんと同じような表情で振り返ります。ニューヨークにいるはずの夫からの便りを待っているのでしょう。その様子をやはりマーガ

レットさんを見守ったようにノーマンさんは見守り続けています。きっと来年には一面に咲くだろうマーガレットの花もノーマンさんと一緒に見守ってくれるでしょう。

私の南側斜面のお花畑ではジェニファーちゃんとコリンくんがトロールとじゃれまわっています。二人ともおじいちゃんの事が大好きです。ジェニファーちゃんはよくおじいちゃんに白詰草の花冠を作ってプレゼントしてくれます。



ノラさんはあれほど嫌っていた田舎暮らしが逆に大好きになり、日に日に伝統回帰をしているようです。最近では洋服も伝統的ウェールズ風のものを着るようになりました。もちろんノーマンさんの大好物の木苺のジャムは欠かした事はありません。

年々列車の本数は少なくなり、廃線の噂もちらほらと流れるようになりました。でも、ノーマンさんはそれでもいいと思っているようです。むしろこの鉄道の最後を見届けてから死にたいなどと、最近ではお茶の席で話すようになりました。

何はともあれ、今ノーマンさんは日々とても幸せそうで、私にはそれがとてもうれしいのです。

＊

ところで、後日談があります。もちろん、これは未来の話なのでどうして私が知ってるの？と聞かれると困るのですが。村の守護神、鷹のキースがこっそり教えてくれた、とでも言っておきましょうか。

ノラさんの夫、ショーンさんは7年程後にニューヨークから帰って来ます。だんだんと都会でも原点回帰の動きが出て来て、ショーンさんのやっていた音楽でもルーツミュージックが注目されるようになったのです。ショーンさんは自分の源流を求めてノラさんの所へ戻って来るのです。・・・というのは建て前で、本当は最先端を追い求める生活に少し疲れたのかもしれない。ショーンさんは隣町、カウタウンのパブ「ウィッシュボーン」で毎夜伝統音楽を奏でています。

ノラさんはマーガレットさんから習ったジャム作りを研究発展させて、いろいろなジャム作りに挑戦するようになります。それが全英で評判になり、今では遠くからノラさんのジャムを買い求める人が来るようになります。ノラさんのお陰でこの村もほんの少し賑やかになっていくのです。

ジェニファーちゃんもコリンくんもそれぞれ村を出て行きましたが、なんだかいつか帰ってくるような気がするのとノラさんはいつも言っています。

ノーマンさんは88歳で天寿を全うします。鉄道の最後を見届けると言っていましたが、驚いた事に終点のランズエンドがナショナルトラストの管轄地となって、観光客が訪れるようになるのです。そしてこの鉄道も保存鉄道として観光客を運ぶようになり、ノーマンさんが現役だった頃よりたくさんの人が利用するようになるのです。



そして、私、古びた車庫は、ピカピカにペンキを塗り直してもらって、保存鉄道の資料展示館となります。壁には汽車の横で誇らし気に立っているノーマンさんの写真も飾られています。それにボビー、いえトロールの小屋も現役です。小屋の主人はとっくに天上の人（犬？）になのですが、小屋はお土産用のノラさんのジャムのディスプレイの引き立て役になるのです。

そうそう、もちろんノーマンさんのストーブも現役です。そしてストーブ横の棚にはやっぱり年代物のウイスキーを必ず置いておくようにしてあります。建て前は緊急用なのですが実はショーンさんが時々飲んでいるようです。でも、これはないしょ。

線路横に一面に広がるマーガレット畑は、これからもいつまでもここを通る人々の目を楽しませてくれるでしょう。

